

宿縁

二月号

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号

浄土真宗
本願寺派

中原寺

TEL 0477-372110 292
FAX 0477-372110 262

たきぎに火がつくと

たきぎは火になる



真理(本当のこと)に目覚めた仏陀釈尊はその教えを私たちに説かれました。それが仏教です。その教えを学び身につけたものはすべてこの上ない安らぎを得ることができると、人びとはなぜその道を真剣に求めようとしないのでしょうか。

「釈尊はクシナガラ郊外、シャーラ(沙羅)樹の林の中で最後の教えを説かれました。

「弟子たちよ、おまえたちは、おのおの、自らを灯火とし、自らをよりどころとせよ、他を頼りとしてはならない。この法を灯火とし、よりどころとせよ、他の教えを

よりどころとしてはならない。

弟子たちよ、これまでおまえたちのために説いたわたしの教えは、常に聞き、常に考え、常に修めて捨ててはならない。もし教えのとおりに行うなら常に幸いに満たされるであろう。」(仏教聖典より)

さて、人びとの生き方は、これとはうらはらに、説かれたこの教えに背き日々の生活に振り回され、他人の言動に惑わされて右往左往して落ち着くことがあります。

真理(本当のこと)の反対語は嘘(うそ)ですから嘘の人生を積み重ねていることになりま。一番恐ろしいのはその事に気がつかないことです。もつといえは本当のことが嫌いで嘘のことが好きなのです。さらにいえば真の幸いを求めることに心がなく、不幸の積み重ねを仕方ないと思っている生き方であるといったら言い過ぎでしょうか。

仏教をこの世ではじめて大きく説き明かされた釈尊は、人間とそれを取りまく自然にその透徹した眼を向けられ、ついに「諸行無常(しよぎようむじょう)」「諸法無我(しよほうむが)」という二つの真理を見出されました。諸行無常とは、自然も、私たちもすべてはうつろい易く、時々刻々に生滅変化していくものであるということです。そして、そうであるならば、自己に関して永久不変な実体というものなど、あろうはずがないというのが、諸法無我の意味です。

しかし、今ここに生きる私たちの実体というものを考えれば、無常・無我ということの真の納得が、いかに難しいものであるかということ。私たちが、こうした真理(本当のこと)を示された時、それは確かに真実であろう、と、いちおう納得してみますが、同時に、無常だというけれども、今日の(私)は、数か月前の(私)と何一つ、あるいは、ほとんど変わらないではないかという思いをつのらせるのではないのでしょうか。遠く幼い頃の自分と比べれば、確かに成長という変化があるわけですが、それでも、何かしら変わらないものが自分の中にあることを、私たちは実感として持っています。そして、その(変わらない)というところに引き寄せられて、それを自己に関する実体的なものと考えて執着に気持ちをとくましくしていくのが、私たちの姿ではないかと思えます。

老いたるも 若きも死ぬる習いぞとしりかほにして しらぬ身ぞうき

(僧英俊 道歌)

(人間というものは、いずれは死んでいくものなのだ、と、誰もがわけ知り顔でいうけれども、そういうながら生に執着し、自己に執着して生活している。本当は、わかっていないのだ。憂きことだよ。)

こんなはずではなかった!こんな目に遭おうとは思はなかった!との繰り返しは、この歌のとおり、ほんとうは、わかっていないということのあらわれです。

しかし、ここに今までと違う眼の転換があることを知らねばなりません。

「帰去来(かきこ)帰(かへ)りなんいざ、他郷(たごう)人間世界のモノサシ)には停(とど)まるべからず。仏に従(したが)いて本

家(さと)りの教えに帰せよ。本国(浄土)に還りぬれば、一切の行願、自然に成ず。悲喜交わり流る。深くみずから度(はか)るに、釈迦(しやくか)の開悟(かいご)によらずは、弥陀(いただ)の名願(なむね)南無阿弥陀仏(なんむあみだぶつ)のはたらきいずれの時にか聞かん。仏の慈恩(じいん)を荷(お)いても、実に報(むか)しがたし」

(教行信証 親鸞)

私たちが惑わす根本の煩惱(ぼんご)を染汚心(せんましん)と云って、穢(け)れたという意味です。常に自分のモノサシで判断する濁(にご)った心です。けがれた心とは、私たちがそれによって惑乱(わくらん)され、その結果、仏との距離(きょり)がいつこうに縮(ちぢ)まらないばかりか、いよいよ広(ひろ)がるうとする心のあり方です。

世間で間違(まちが)って使う「信心」は、大(おほ)意(い)自(じ)分の願(ね)いや望(のぞ)みを叶(かな)えるために神(かみ)仏(ぶつ)に依(よ)頼(らい)することと考えていますが、(信)といふことは、私たちの心を清(きよ)めていく力(ちから)をもつているといのが、仏教(ぶつこう)の基本的(きほんてき)な考え方(かたがた)であるといわれています。したがって、(不信)は、私(わが)たちの中に、(信)が立ち上(た)がって、(不信)の年(とし)をさ(さ)えぎる心(こころ)作用(さくごん)ですから、心を穢(け)すものであるのです。信心(しん)の起(おこ)りとすがたを譬(たと)えた(たきぎと火)「安心(あんしん)信心(しん)決定(けつじやう)鈔(しやう)」の中の次の文章(ぶんしょう)に注(しゆ)目(め)しましょう。

「薪(たきぎ)に火(ひ)をつければ離(わか)れることなし。薪(たきぎ)は私たちの心(こころ)に譬(たと)えられる。火(ひ)は必ず(かならず)すべてのものを信(しん)に目覚(め)めさせて捨(す)てないとの仏(ぶつ)の光明(くわうみやう)に譬(たと)える。だからわが心(こころ)を離(わか)れて仏(ぶつ)心(しん)もなく仏(ぶつ)心(しん)を離(わか)れてわが心(こころ)はない。これを南無阿弥陀仏(なんむあみだぶつ)という。」

仏法(ぶつぽう)を聞(き)くと、薪(たきぎ)に火(ひ)がつくのです。薪(たきぎ)は信(しん)の火(ひ)とな(な)って我(われ)が身(み)心(しん)を包(か)みます。何事(なにごと)にも恐(おそ)れない清(きよ)い信(しん)の火(ひ)が灯(とも)ります。